

日本語学習者の個性の働き

ー 学習者の心理類型が学習状況に与える影響 ー

申 恩浄

要 旨

今まで外国語学習の成就度に関わる学習者の個性に関する研究は主に学習スタイルや学習ストラテジーなどのような学習者の認知的な変数を中心として行われてきた。しかし、認知的な要因だけを取り入れた教授方法や第2言語習得理論は人間行動の情意的な要因を看過する傾向があり、第2言語習得理論を構築していくのに限界を持たざるをえないと思われる。従って、本稿は人間のより根本的な情意的な側面と見なされる学習者の心理類型(MBTI: Myers-Briggs Type Indicator)の特徴を調べることで、認知スタイルとも非常に密接な関係を持っていると思われる学習者の心理类型的な特徴が日本語習得においてどのような役割を果たしているかを考察しようとする。

【キーワード】

情意的要因 学習者の個性 心理類型(MBTI) 認知スタイル

1. はじめに

同一の学習環境の中で同じインプットが与えられても、それぞれの学習者の到達度に異なりが出るのは学習内容を理解し、運用する学習者の内在的な要因が学習者によって違うのに起因すると想定される。それゆえ、外国語教育において学習そのものだけに研究の焦点を当てている以上、学習者中心の外国語教育の論議は限界を持たざるをえないと思う。

今までの第二言語習得研究は大きく2つに分けて考えられる。一つは言語の取得過程そのものに焦点を当てた研究、もう一つは学習者および学習にかかわる諸要因に焦点を当てた研究である。(Larsen-Freeman, 1991; 林さと子, 2006再引用)しかし、今までの学習者の個性性についての研究は主として、動機、ニーズなど、同じ属性を持っている学習者グループの共通特質を中心として行われてきた。それゆえ、学習結果、あるいは言語習得が個々の人によって違うということについて、「どのように」、「なぜ」については多く議論されておらず、対応も十分であったとはいえない(林さと子, 2006)

従って、本調査は第2言語習得と関連のある学習者変因の中でも学習者の情意的な要因、とりわけ心理類型と日本語習得との相関関係を調べるために一つの予備調査として行われた。

2. 先行研究

2.1 第2言語習得研究における学習者の個人差研究

言語学習において、学習結果に影響を及ぼす要因は次のように大きく3つに分かれている。

- ① 環境的な変数：教育環境、社会文化的背景、家庭環境など
- ② 授業の変数：教材、教授法など
- ③ 学習者の変数：学習者の認知的な要因と情意的な要因

ここで、学習者の変数として挙げられている認知的な要因としては一般的な学習能力、適性、学習様式、学習ストラテジーなどがあり、(Stern, 1983) 情意的な要因としては、自我尊重 (self-esteem)、抑制(inhibition)、不安(anxiety)、動機(motivation)、感情移入(empathy)、態度及び性格などが挙げられる。(Brown, 1994) また、学習者の個性性要因を大きく「認知変数」「情意変数」「性格変数」に分けて扱われてきた場合も多いが、それぞれの下位概念にどのような要因を含めるべきかについては一致した概念はない。(真嶋, 2005) Brownは学習者の個人差に関する要因を1)スタイルとストラテジー 2)性格的な要因に分けて、それぞれの下位項目として、第2言語習得と関連のある項目を表1のように挙げている。

表1 学習者の個人差に関わる要因(真嶋、2005)

スタイルとストラテジー	学習スタイル	場依存・場独立 (FD/I)、差右脳機能 曖昧さへの寛容、熟考・衝動
	学習ストラテジー	メタ認知ストラテジー、認知ストラテジー 社会情意的ストラテジー、コミュニケーションストラテジー
性格的要因	情意領域	自尊心 (self-esteem)、防衛本能 (inhibition) 危険を冒すこと (risk-taking)、不安 (anxiety) 共感感情移入 (empathy)
	MBTI 類型 (心理類型検査)	外向性 (extraversion)・内向性 (introversion)) 感覚 (sensing)・直感 (intuition) 思考 (thinking)・感情 (feeling) 判断 (judging)・知覚 (perceiving)
	動機	道具的志向と統合的志向, 内的・外的動機
	情意の神経生理学	
	情意要因の測定	

Kaplan編(2002)における個人差の扱いは、比較的に目立たない形になっているが、その中でOxford(in Kaplan 2002)による「言語学習の変異に関連する学習者個人の性格」という節では、大きく3点に絞って論じている。1)「スタイル要因」2)「認知要因と情意要因」3)「人口統計学的要因」などである。(真嶋、2005、再引用)

このように、学習者の変数は学習の結果に大きい影響を及ぼしているため、学習者の認知的要因と情意的要因の体系的な分析は教育現場での応用のためにも重要な課題になっている。とくに、近年、学習者の情意的要因は潜在的に外国語学習の成功成否に重要な影響を与える個性的要因として認識されているし(Samimy & Tabuse, 1992)、情意的な要因に対する体系的な分析を通じて学習者の多様なニーズと興味をより深く理解することが可能であろうと予測している。

本調査ではこのような情意的な要因の中でも性格的な要因の働きについて考察して見ようと思う。それは

「性格」というのは人間が持っている特性の独特な様式であり、ある個人の行動の原因と結果を説明するのにおいて、総体的な特性だと言えるのである。また、性格の特性は人間がどのように学習し、何を学習するのかについて個性性を表しているため (McCaulley & Natter, 1980; Moody, 1988; 李、2001再引用) 外国語学習において個人の反応と学習結果を理解するのに重要な学習者変数になり得ると思う。

2.2 第二言語習得におけるパーソナリティ要因に関する研究

第二言語習得研究におけるパーソナリティ要因に関する研究は少ないが、これはパーソナリティと外国語学習が結びれる理論的な土台がないのに起因する。(이용숙, 2001:17 再引用) そして、内向・外向性という人間の性格の限られた一面だけを取り上げているのが先行研究の限界点と指摘される。

今までのパーソナリティと外国語学習との相関関係に関する研究は表2のようである。

表2 パーソナリティと外国語学習との相関関係に関する研究

時期	体系的な研究者	結果からの示唆点
70年代	Rubin (1975)、Stern (1975) Chastain (1976)、Rossier (1976) Hamayan (1977)、Seligman (1977)	外向性は言語能力と肯定的な関係である
80年代	Niman, Todesco (1978)、Busch (1982) Stern (1983)、Skehan (1989)	外向性と内向性が外国語の学習を促進させるかどうかは明確ではない。しかし、異なる方式で外国語学習に影響を及ぼしている。
90年代	Ehrman & Oxford (1990) Carrell, Prince & Astika (1996) z 若本(1997)	-MBTIの心理タイプによって学習する際によく使うストラテジーに違いがある -内向的な性格が認知的・学問的な言語能力発達と肯定的な関係を持つ -英語の習熟度は感覚的な学習者より直感的な学習者の方が高い -外向的な学生は社会的・機能的練習のストラテジーを使う反面、内向的な学生は共同授業・Risk-takingを避ける傾向がある

2.3 MBTI(Myers-Briggs Type Indicator)

最近ではパーソナリティを測定する質問紙としてはMBTI(Myers-Briggs Type Indicator)が多く知られ、MBTIを利用した研究も増加してきている。

MBTI(Myers-Briggs Type Indicator)はC.G.Jungの心理類型論に基づいてK.C.Briggs(1875-1968),I.B.Myers(1897-1980)により、開発された非診断性心理類型質問紙である。Jungは、人間は同じ事物を見ているもそれぞれ異なる判断をするし、その判断に基づいて行動しているのを観察し、人間のこのような判断と行動の基底には一定の一貫性と傾向性が存在しているのを主張した。彼は人間行動の異なりには人間が回りの状況や情報を認識して判断する過程が人によって異なっているのに起因すると説明している。「認識」というのは事物、人、事件、あるいはアイデアを自覚するすべての方法を示している概念であり、「判断」というのは認識した内容に基づいて何らかの結論を導き出す活動である。これらの2つの心の活動にもそれぞれ2つの対極の機能がある。「認識」の一方の機能がSensing(S)、対極の機能が直感機能iNtuition(N)であり、「判断」にも思考機能Thinking(T)と感情機能 Feeling(F)の2つの対極した機能がある。誰もが情報を収集するのに認識

機能(SまたはN)の一方を他方よりも好んで使い、それを判断するのに判断機能(TまたはF)の一方を好んで使う自然な傾向、いわばMBTIのいう心の利き手を持っていると言われる。(大野、2006、再引用)また、これら4つの心的機能は誰もが自分の外界と内界の両方で使っており、そのうち自分の外の世界に興味・関心を向ける心的態度を外向Extroversion(E)、思索や内省することなど内の世界に興味・関心を向ける心的態度を内向Introversion(I)と呼ぶ。つまり、外界と内界のうち、どちらか一方により関心を向けやすく指向する心の機能を繰り返し使っているうちに、その人固有の物の見方や考え方、人間関係の持ち方を発達して行き、それらが人それぞれの基本的な違いや多様性となり、パターンをもって現れたものが性格タイプとってよいだろう。

ところで、MBTIタイプの分類は、その基本的な考え方はJungのそれを採用しているがJungの3つの指標に人間が外界に対処する様式として判断機能を使っているか、認識機能をより好んで使っているのかによって判断的機能Judging(J)、認識的機能 Perceiving(P)という指標を加えて性格を16タイプに分けている。

図1 MBTIの4つの指標

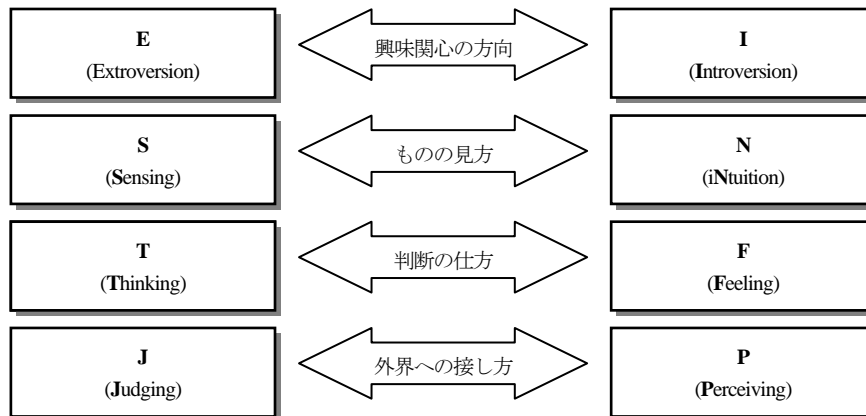


図2 16タイプの機能・気質分類

I-J 決定指向内向	ISTJ	ISFJ	INFS	INTJ
I-P 適応力ある内向	ISTP	ISFP	INFP	INTP
E-P 適応力ある外向	ESTP	ESFP	ENFP	ENTP
E-J 決定指向外向	ESTJ	ESFJ	ENFJ	ENTJ
	-ST- 実際的・事実中心	-SF- 同情的・友好的	-NF- 熱情的・洞察	-NT- 論理的・創意的

3. 調査目的

学習者の心理類型の学習状況に与える影響を明らかにしようとする。研究課題は以下のようである。

- 1) 学習者の好む学習状況と学習者の心理類型とは関係があるか
- 2) 学習者がよく使う学習ストラテジーと学習者の心理類型とは関係があるか
- 3) 異文化適応と学習者の心理類型とは関係があるか

4. 調査方法

2006年10月から日本の大学で留学している学部生3名を対象して、まず、自分の心理類型についての認識必要性とMBTI調査の特徴について説明するオリエンテーションを行った。その後 MBTI(AV型)心理類型検査を実施し、被験者の心理類型について個別相談を行った。

最後の個別インタビューは下のような項目を設定して、行った。

①好む学習状況

受講の経験のある科目についての満足度とその理由、自身のあるテストタイプ

②日本語学習方法とストラテジー

科目別に行われてきた主な学習方法

③異文化適応面

日本生活に対する満足度や自分の日本語学習において日本での生活が持つ意味

5. 調査結果

5.1 心理類型分布と特徴

機能 心理類型	主機能	副機能	劣等機能
ESTP	感覚機能(S)	思考機能(T)	直感機能(N)
ENTP	直感機能(N)	思考機能(T)	感覚機能(S)

5.2 日本語学習における心理類型の働き

調査項目 心理類型	好む学習状況	学習方法	異文化適応
ESTP	S機能とE機能との関連性が高い	S機能と関連性が高い	P機能に基づいたS機能を使う傾向
ENTP	N機能とE機能との関連性が高い	N機能と関連性が高い	P機能に基づいたN機能を使う傾向

5.3 調査からの示唆

- 1)日本語学習において、学習への興味や学習ストラテジーの使用傾向、葛藤状況の対処方法に学習者の心理類型が深く関わっている。
- 2)自分の生来の性格特性と関連のあるストラテジーとその対極の機能と関連のあるストラテジーをどれほど積極的に活用していくかによって成功的な学習が決定される(Ehrman & Oxford,1990)という主張を支持する。

5.4 本調査の限界

調査対象者の人数が少なく、結果の一般化がしにくいし、対象者の中には帰国子女も含まれ、同一のJFL・JSL状況だったとは言えない。

6. 今後の課題

新たな対象群選定と測定方法の補完を通じて日本語学習における韓国人の心理類型の働きについて調べようとする。そして、言語の特定技能に限らず、言語技能別に学習者の心理類型との相関関係が見られる研究方法が求められる。

参考文献

- 구광현, 가영희, 이규영 (2006) 『교육심리학』, 서울, 동문사
- 김미란 (2001) 학습자의 성격변인과 영어오류 수정간의 관계, 석사논문, 서울대학교
- 김정택, 심혜숙 (2000) 16가지 성격유형의 특성, 한국심리검사연구소
- 김혜경 (1996) 성격유형과 학습기술 및 학업성취도와와의 관계, 석사논문, 한국외국어대학교 교육대학원
- 김원호 (2003) 학습자의 성격유형 (MBTI) 이 인터넷과 웹기반원격교육 활용에 미치는 영향, 석사논문, 한양대학교 교육대학원
- 박세희 (2006) MBTI성격유형과 수학학업 성취도 및 수학 선호도와와의 관계에 관한 조사 연구, 석사논문, 국민대학교 교육대학원
- 민승기 (2000) 성격이 성인 영어학습자의 쓰기과정에 미치는 영향, 석사논문, 성균관대학교 교육대학원
- 박은정 (2005) 성격요인이 영어학습 전략에 미치는 영향, 석사논문, 단국대학교 교육대학원
- 박진식 (2004) 성격유형과 과학 성취도와와의 관계, 석사논문, 단국대학교 교육대학원
- 박현선 (2000) 성격유형과 영어 능력과의 관계, 석사논문, 이화여자대학교 교육대학원
- 송영숙 (2003) 학습자의 외향성/내향성 성격유형과 면대면/온라인 토론학습 유형의 토론 참여도와 만족도에 미치는 효과, 석사논문, 인천대학교 교육대학원
- 신의정 (2002) 외국어학습 전략 훈련이 학습전략활용,

- 학업성취도 및 학습신념에 미치는 효과, 박사논문, 전남대학교학원
- 이용숙 (2001) 외국어로서의 한국어 학습자의 성격유형에 따른 학습결과 분석연구, 석사논문, 연세대학교학원
- 오수진 (2003) 성격 유형에 따른 학습전략 사용에 관한 연구, 석사논문, 청주교육대학교 교육대학원
- 정희금 (2004) 좌우뇌기능분화와 좌우뇌 선호도가 MBTI삼라유형에 미치는 영향, 석사논문, 연세대 대학원
- 조일주 (2004) 웹 기반 토론 학습에서 학습능력 및 성격특성에 따른 구성이 학습자의 상호작용에 미치는 효과, 석사논문, 한국교원대 교육대학원
- 최수환 (2000) 학습자의 동기신념 및 자기조절 학습전략과인지갈등과의 상관관계, 석사논문, 한국교원대 교육대학원
- 大野雄子 (2006) 「教師の自己理解の重要性」 『2006日本語教育学会秋季大会予稿集』 26-31
- 倉八順子 (1991) 「外国語学習における情意要因についての考察」、慶応義塾大学大学院社会研究科紀要33、17-25
- 中野靖彦 (1986) 「学習のペースと学習者のパーソナリティー特性に関する研究」、日本教育心理学会編、巻号34(3)、257-261
- 真嶋潤子 (2005) 「学習者の個人差と大に言語習得-学習スタイルを中心に」 『第二言語としての日本語の習得研究』 巻号8、115-134
- 林さと子 (2006) 共著 『ことばを学ぶ一人ひとりを理解する-第二言語学習と個性性』、春風社
- 藤原伸彦、三宮真知子 (2003) 「学習者パーソナリティー特性によるコミュニケーションメディア選好の差異」、『教育システム情報学会誌』 巻号20(2)、95-105
- 八木成和 (1996) 「大学生の学習観と性格特性との関連性」、性格心理学研究編、巻号4(1)、1-9
- 若本夏美 (1997) 「言語学習と学習者要因の関連性について：MBTIを利用したPersonalityについての研究」、総合文化研究所紀要、巻号14、166-179
- 若本夏美 (2005) 「パーソナリティー要因が外国語学習に与える影響について - 日本人英語学習者への Myers-Briggs Type Indicator (MBTI)の利用可能性」、同志社女子大学学術研究年報、同志社女子大学学術研究推進センター編、巻号56、135-139

しん うんじょん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 研究生
Shinsegae21@yahoo.co.jp